

令和 4 年 5 月 6 日現在

機関番号：13802

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00642

研究課題名（和文）Four-dimensional analysis of the spatio-temporal systems: Space, time, history and discourse

研究課題名（英文）Four-dimensional analysis of the spatio-temporal systems: Space, time, history and discourse

研究代表者

中安 美奈子 (Nakayasu, Minako)

浜松医科大学・医学部・教授

研究者番号：80217926

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語の歴史における時空間体系に関して、新たな次元である談話を加えることにより、時間・空間・歴史・談話の四次元による体系的な分析を行った。話者は、自分の領域と事象との距離を判断しながら時空間の要素を使用し、近称または遠称のパースペクティブをとっている。本研究においては、談話においてこういったパースペクティブがどのように展開するのか、この談話における展開にどのようなファクターが関連しているのかについて検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

時間体系または空間体系のいずれか片方の分析は行われてきたが、時間と空間の双方に関わる領域、特に歴史的なデータについての系統的な分析は、これまで研究代表者のみが行ってきた、他に類をみない研究である。時空間体系が歴史的にどのようなものであったのか、さらに、時空間体系において重要な意味を持つパースペクティブが談話の中でどのように展開していくのかに切り込み、関連するファクターを特定した意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：This research project conducted a systematic four-dimensional analysis of the spatio-temporal systems in the history of English, i.e. space, time, history and the new dimension, discourse. Judging how distant the situations are from their domain, speakers exploit the elements of space and time to take either a proximal or distal perspective. This research examined how perspectives change as discourse progresses, and what factors are relevant to this change in discourse.

研究分野：人文学、言語学、英語学

キーワード：時空間体系 四次元分析 談話 歴史語用論 歴史談話分析

1. 研究開始当初の背景

我々の世界においては、常に数限りないさまざまな事象が生起している。話者はこれら事象のなかから言語化するものを選択し、その事象が自分の領域からどの程度離れているのか、すなわち、近いのか遠いのかを判断する。それにより、近称 (proximal) または遠称 (distal) の代名詞、副詞、時制、法助動詞などの時空間の要素を使用して言語化するのである。また、このような時空間の要素は、連携して近称または遠称のパースペクティブを構成したり、こういったパースペクティブが交替したりすることがある。要素の連携やパースペクティブの交替は、時間の領域または空間の領域のみで起こることもあれば、両者を統合した時空間の領域で起こることもある。言い換えれば、これまで個別の現象として時間または空間の領域内で捉えられてきた現象が、時空間体系 (spatio-temporal systems) という大きな枠組みの中で捉えられるということである。

研究代表者は、科学研究費の補助を受け、歴史的なデータを使用して、先行研究が試みてこなかった、時空間の領域に関わる系統的な分析を展開してきた。歴史語用論 (historical pragmatics) の主旨に沿い、中英語 (1100 年頃—1500 年頃) と初期近代英語 (1500 年頃—1700 年頃) の時空間体系の分析を行っている (Nakayasu 2018 など)。この時間、空間、歴史の分析に加え、歴史談話分析 (historical discourse analysis) の観点も取り入れながら、これまでパイロット的な分析にとどまっていた談話の分析を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究プロジェクトの目的は、英語の歴史における時空間体系を分析するにあたり、これまでの分析に新たな次元、すなわち談話を加えることにより、時間・空間・歴史・談話による四次元の分析を行うことである。したがって、時空間体系に関する研究課題は次のようになる。

- (1) 時間と空間の要素とは何か、このような時間と空間の要素がどのように関連し合っ
て近称あるいは遠称のパースペクティブを構成するのか [時間] [空間]
- (2) このような時空間の体系は、ある歴史的な時間においてどのように記述されるのか、
また、この体系は歴史的にどのように変化したのか [歴史]
- (3) 時空間の要素が関連し合っ
て構成されるパースペクティブは、談話が進むにつれてど
のように展開していくのか [談話]

特に、歴史的なデータにおいて、談話の中でパースペクティブがどのように展開していくのか、このような展開にどのようなファクターが関与しているのかに焦点を当てながら分析を行った。

3. 研究の方法

本研究は、過去における言語使用とその歴史的発達や原理を研究課題とする歴史語用論の主旨に沿った方法論 (Taavitsainen & Jucker 2015 など) を採用し、歴史談話分析的な観点も組み入れた。分析にあたっては、次の時空間の要素を対象とし、量的及び質的な分析を行った。

- (1) 時間体系の要素
時制、法助動詞、時間の副詞
- (2) 空間体系の要素
代名詞、指示詞、空間の副詞
- (3) その他、時空間体系に関連する要素
間投詞、呼びかけ語、メタディスコース、ディスコースマーカーなど

(1) (2) の時空間体系の要素を話者の領域に近いものを近称、遠いものを遠称の二分法により分類し、どちらをとる傾向が強いのか、これらの要素がどのように連携して近称あるいは遠称のパースペクティブを形成するのかを観察した。ただし、代名詞には中称 (medial) が存在し、三分法をとっている。中称は対話の場に密接に関わっているため、二分法に当てはめた場合、近称に分類した。(3) の時空間体系に関連する要素については、特に談話の中でどのようにパースペクティブの形成や交替に影響を与えているのかを検討した。

また、歴史語用論では次の二つの対応づけ (マッピング) の方向が想定されており (Jacobs & Jucker 1995)、本研究では両方向の対応づけを採用した。

- (1) 言語形式に着目してそれに対応する機能を分析する「形式—機能の対応づけ」
- (2) 機能に着目してそれに対応する言語形式を分析する「機能—形式の対応づけ」

代名詞や法助動詞などは形式からの対応が容易であるが、時制やディスコースマーカ―などは形式と機能が一致するとは限らないため、後者の対応づけを採用した。

四つの次元や様々な要素が複雑に絡み合う時空間体系を分析するという本研究プロジェクトの目的や方法論から、コーパスの範囲を絞って綿密に分析する必要があった。使用したコーパスは次のとおりであり、主として中英語のものを対象とした。

- (1) *The Riverside Chaucer* (Benson 1987)
- (2) *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century, Part I* (Davis 2004[1971])
- (3) *Piers the Plowman* (Skeat 1972[1869])
- (4) *The Riverside Shakespeare* (Evans 1997)
- (5) *The Socio-pragmatic Corpus* (Archer & Culpeper 2003)

4. 研究成果

本研究プロジェクトは、これまで行われてこなかった、歴史的なデータにおける時空間体系の体系的な分析を詳細に試みたものであり、国内外の研究において、他に類をみないものである。本研究の意義は、特に以下の点にある。

- (1) 一見無関係にみえるいくつかの言語現象を一つの大きな現象として捉え直したこと
- (2) 時間・空間・歴史・談話の4つの次元からの時空間体系の分析を行ったこと
- (3) 歴史語用論、歴史談話分析の立場から時空間体系を理論的・実証的に分析したこと
- (4) いくつかの異なるレジスターの時空間体系を分析し、それぞれの特徴を可視化したこと

ここでは、新たに加わった次元である談話を中心に、顕著な研究成果について紹介したい。時空間体系において、次の談話に関するファクター（セクション3「研究の方法」の冒頭で時空間に関連する要素の例（3）を挙げてある）を抽出し、どのように時空間体系に影響を与えているのかを分析した。

(1) 談話を構造化する要素

まず、テキストダイクシス的な表現があげられる。時空間の要素が良い例で、プロトタイプ的な時間的、空間的意味に加えて、談話の中で拡張された機能を持つ。空間の近称の指示詞 **this** は前方照応的にしばしば用いられ、生起数は多くないが、後方照応的な例もみられる。一方、遠称の指示詞 **that** は前方照応的な用法のみである。また、時間の近称の副詞 **now** はディスコースマーカ―としてトピックの変更を行うため、そこからパースペクティブが交替することがある。一方、時間の遠称の副詞 **then** は、事象の生起する順序を示す用法については、パースペクティブの交替を起こさないのが通例である。

また、メタディスコース (**that is to say** など) は、テキストの命題に新しい要素を加えずに、すでにある命題を指示する機能を備えており、話者の領域に直接結びついているため、文脈に関係なく近称のパースペクティブをとることが多い。

(2) 近称または遠称のパースペクティブを取りやすくする要素

近称／遠称の時空間の要素は連携して近称／遠称のパースペクティブを構成するが、それに加えて、時空間に関連する要素がいずれかのパースペクティブを取りやすいものにする事例がしばしばみられる。これらは、時間あるいは空間のいずれかの領域でなく、統合された時空間の領域に関わるものと思われる。命令法、呼びかけ語、質問や脅迫などの言語行為、間投詞などはいずれも発話の場面に密接に関連しており、近称のパースペクティブを促進する。また、時間の副詞節を導く **when** は主節と従属節のパースペクティブを近称または遠称に同期させる。

(3) パースペクティブを交替させる要素

まず、パースペクティブを交替させる要素として、上記(1)で挙げたように、**now** はパースペクティブを近称に交替させることがある。その他に、**wherefore** は遠称から近称へ交替させることが多い。手紙に見られる **it is seyde here** と **it is seyde ther** は、それぞれ近称と遠称に交替させる表現である。

次に、言語行為の交替がパースペクティブを交替させる要因になることがある。報告から意見、

報告から約束が、近称に交替させる典型的な例である。

そして、語り手の語りの様式が変化する際にパースペクティブの交替が起こる事例を指摘しておきたい。登場人物の台詞（直接話法）から語りになる時に遠称に交替する、対話で相手の発言を遠称で受けるのはわかりやすい例であるが、その他に、語りから語り手のコメントに変わる際には近称、指示から例示へ変わる際には遠称が用いられる例が観察できた。

(4) 時間体系、空間体系、そして統合された時空間体系の中でパースペクティブを交替させるファクター

時間体系の領域においてパースペクティブを交替させるファクターとして、登場人物により時制を近称または遠称に交替する事例、また、出来事の区切り（冒頭と完結）には遠称を使用し、聞き手を物語に引き込みたい出来事の最中の記述には近称に交替させる事例がある。

空間体系の領域におけるファクターとしては、対話者との関係により中称の代名詞（th形式とy形式）が交替する現象や、話者／書き手のいる場所と別の重要な場所を近称／遠称の対比で表現する例が観察できる。

さらに、統合された時空間体系の領域に関連するファクターとして、何らかの世界の対比が典型的である。死んだ者の世界を遠称のパースペクティブで表現し、生きている者の世界には近称を用いる例、さらに神の世界を遠称で表し、人間の世界は近称で表現する例がある。

以上、研究成果の一例を紹介したが、本研究プロジェクトの成果は、初期近代英語の裁判記録に関する椎名美智氏との共同研究にも生かすことができたということに触れておきたい。次のセクション5で発表論文等がリストアップされているが、準備中、審査中の論考もあるため、今後も研究成果を社会に発信していく努力を続けていくつもりである。

時空間体系のような研究領域は、コーパスの分析が容易でないことから、歴史的な言語研究を行う研究者が踏み込んでこなかった領域である。しかし、本研究プロジェクトにより、これまでの研究代表者による三次元による分析に新たに談話の次元を加えることにより、空間、時間、歴史、談話の4つの次元による分析が可能となった。多くの要素やファクターが関連しているため、コーパスを絞ることにより得られた知見を展開しつつ、レジスター間の相違点の分析や、さらに詳細な広い視点からの談話の分析を行うことにより、歴史における時空間体系がどのようなものであったか、さらなる解明に取り組んでいきたい。

引用文献

Archer, Dawn & Jonathan Culpeper. 2003. Sociopragmatic annotation: New directions and possibilities in historical corpus linguistics. In Andrew Wilson, Paul Rayson & Tony McEnery (eds.), *Corpus linguistics by the lune: A festschrift for Geoffrey Leech*, 37-59. Frankfurt am Main: Peter Lang.

Benson, Larry D. (ed.) 1987. *The Riverside Chaucer*. 3rd edn. Boston: Houghton Mifflin Company.

Davis, Norman. 2004[1971]. *Paston letters and papers of the fifteenth century*, Part I. Oxford: The Early English Text Society/Oxford University Press.

Evans, G. Blakemore. (ed.) 1997. *The Riverside Shakespeare*. 2nd edn. Boston & New York: Houghton Mifflin Company.

Jacobs, Andreas & Andreas H. Jucker. 1995. The historical perspective in pragmatics. In Andreas H. Jucker (ed.), *Historical pragmatics: Pragmatic developments in the history of English*, 3-33. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Nakayasu, Minako. 2018. Spatio-temporal systems in Chaucer. In Peter Petré, Hubert Cuyckens & Frauke D'Hoedt (eds.), *Sociocultural dimensions of lexis and text in the history of English*, 125-150. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

Skeat, Walter W. 1972[1869]. *The vision of William concerning Piers the Plowman, together with vita de Dowel, Dobet, et Dobest, secundum wit et resoun, by William Langland*. Text B. (EETS 38.) London, New York & Toronto: Oxford University Press.

Taavitsainen, Irma & Andreas H. Jucker. 2015. Twenty years of historical pragmatics. *Journal of Historical Pragmatics* 16. 1-24.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Minako Nakayasu	4. 巻 56s1
2. 論文標題 Spatio-temporal systems in Shakespeare's dialogues: A case from Julius Caesar	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Studia Anglica Posnaniensia	6. 最初と最後の頁 425-450
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.2478/stap-2021-0008	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Minako Nakayasu	4. 巻 5
2. 論文標題 Spatio-temporal systems in Chaucer's language: A discourse-pragmatic analysis	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Linguistics Beyond and Within	6. 最初と最後の頁 120-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.31743/lingbaw.5384	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件/うち国際学会 9件）

1. 発表者名 Minako Nakayasu
2. 発表標題 Sone, slepestow・sestow +tis poeple? Spatio-temporal systems in Piers Plowman
3. 学会等名 The History of the English Language - Poznan (HEL-P 2021)（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Minako Nakayasu
2. 発表標題 Spatio-temporal systems in Early Modern courtroom: A case from the trial record of King Charles I
3. 学会等名 The 50th Poznan Linguistic Meeting (PLM2021)（国際学会）
4. 発表年 2021年

1 . 発表者名 Minako Nakayasu
2 . 発表標題 Spatio-temporal systems in Margaret Paston ' s letters
3 . 学会等名 The History of the English Language -- Poznan (HEL-P 2019) (国際学会)
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Minako Nakayasu
2 . 発表標題 Spatio-temporal systems in Chaucer: Space, time, history and discourse
3 . 学会等名 The 6th International Conference of the International Society for the Linguistics of English (ISLE 6) (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Minako Nakayasu
2 . 発表標題 Spatio-temporal systems in Paston letters: Space, time, history and discourse
3 . 学会等名 The 21st International Conference on English Historical Linguistics (ICEHL-21) (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Minako Nakayasu
2 . 発表標題 Spatio-temporal systems in Paston letters: Discourse and diversity
3 . 学会等名 The 28th FILLM (Federation Internationale des Langues et Litteratures Modernes) International Congress (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1. 発表者名 Minako Nakayasu and Michi Shiina
2. 発表標題 Spatio-temporal systems in the trial record of King Charles I
3. 学会等名 The 51st Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (SLE 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Minako Nakayasu
2. 発表標題 Spatio-temporal systems in Chaucer's language: A discourse-pragmatic analysis
3. 学会等名 The 6th Meeting of Linguistics Beyond and Within: International Linguistics Conference in Lublin (LingBaW 2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Minako Nakayasu
2. 発表標題 Spatio-temporal systems in Piers Plowman
3. 学会等名 The International Association of University Professors of English Triennial Conference (2019 IAUPE Conference) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------